

大学生の参禅行動の構造分析(その四)

江見 佳俊
千野 直仁

一、問題の所在

本論文は、われわれが、本学学生課との共同研究のかたちで、「大学生の参禅行動の構造分析」と題して進めてきている一連の研究の第四報であり、第三報で得られた結果を踏まえ、さらに第三報で指摘してきたいくつかの研究上の問題点を可能なかぎり解決していくことも意図して、新たに企てられた昭和五十一年実施の永平寺参禅アンケート調査結果について、総合的な解析を試みた研究成果に関する第一報である。

第三報では、主として、数量化Ⅱ類という、説明変数が定性的要因から成る場合の判別分析的手法を用いて、昭和四十八、四十九両年度の永平寺参禅者を対象として入手し

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

たアンケートの資料に基づいて、坐禅を生活のうちに生かそうとする態度形成の基礎になっていると考えられる参禅経験を媒介としてもたらされた坐禅に対するイメージ変化についての分析を行なった。その結果、坐禅に対するイメージ変化を規定すると考えられる要因は、第二報で、坐禅を生活のうちに生かそうとする態度形成を規定する要因として抽出した、「坐禅指導の受容度」、「法話に対する評価」、及び「永平寺の雰囲気に対する評価」の三要因そのままであることが明らかにされた。

今回の報告は、こうした第三報での報告と、内容的にはそれ程異なるものではないが、第三報で問題として残されていた調査項目の一部のカテゴリーをふやしてみても、また異なる年度の参禅学生のアンケート調査結果についてみ

ても、第三報におけると同様の分析結果が確認できるかどうかを検討することが主な目的である。

を、一、参禅前の坐禅に対する態度(第一ステージ)↓二、

表1 単純集計結果

質問項目	選 択 肢 (1.のみ分類カテゴリー)	度数	%*		
1. 参禅の動機	1. 自己をみつめる自己確立	27	(5)		
	2. 経験のため	43	(8)		
	3. 興味, 好奇心, 前回の経験から	83	(16)		
	4. 勧め, なんとなく, 強制行事	71	(14)		
	5. 分類不能	290	(56)		
2. 参禅の意義 の 評 価	1. 非常に有意義であった	48	(9)		
	2. 有意義であった	155	(30)		
	3. 少しは有意義であった	201	(39)		
	4. わからない	69	(13)		
	5. あまり有意義でなかった	26	(5)		
	6. まったく有意義でなかった	15	(3)		
3. 坐禅時間の 長さの評価	1. 短い	89	(17)		
	2. 適当	342	(67)		
	3. 長い	83	(16)		
4. 坐禅指導に 対する評価	1. きびしすぎる	30	(6)		
	2. 適当	399	(78)		
	3. もっときびしくしてほしい	85	(17)		
5. 坐禅指導の 受 容 度	1. できた	165	(32)		
	2. わからない	223	(43)		
	3. できなかった	126	(25)		
6. 参禅の前後で の坐禅に対す るイメージの 変化	後 前	よ	い	どちらで もない	わるい
	よ	い	134(26)	61(12)	18(4)
	どちらでもない		116(23)	124(24)	11(2)
	わるい		14(3)	16(3)	20(4)
7. 坐禅が学生生 活の方向づけ に役立つかど うかの評価	1. 非常に役立った	23	(4)		
	2. かなり役立った	38	(7)		
	3. 少しは役立った	206	(40)		
	4. わからない	169	(33)		

参禅中の諸経験(第二ステージ)↓三、参禅後の坐禅に対する態度(第三ステージ)、という三つのステージから成る力動

は、この三つのステージのうち、第三ステージに焦点を

	5. あまり役立たなかった	53	(10)
	6. まったく役立たなかった	25	(5)
8. 今後も坐禅の機会を持ちたいか	1. 非常に思う	32	(6)
	2. 思う	85	(17)
	3. 少しは思う	186	(36)
	4. わからない	91	(2)
	5. あまり思わない	82	(16)
	6. 全然思わない	38	(7)
9. 食事に対する満足度	1. 充分であった	79	(15)
	2. まあまあであった	117	(23)
	3. ふつうであった	122	(24)
	4. あまり充分とはいえなかった	114	(22)
	5. 不足であった	82	(16)
10. 睡眠に対する満足度	1. 充分とれた	62	(12)
	2. 少しはとれた	157	(31)
	3. わからない	25	(5)
	4. あまりとれなかった	181	(35)
	5. ほとんど眠れなかった	89	(17)
11. 法話に対する評価	1. 非常に有意義であった	38	(7)
	2. 有意義であった	120	(23)
	3. 少しは有意義であった	198	(39)
	4. わからない	101	(20)
	5. あまり有意義でなかった	35	(7)
	6. まったく有意義でなかった	22	(4)
12. 永平寺の雰囲気に対する評価	1. 非常によかった	75	(15)
	2. よかった	181	(35)
	3. 少しはよかった	114	(22)
	4. 何も感じない	73	(14)
	5. あまりよくなかった	48	(9)
	6. まったくよくなかった	23	(4)

* 小数点以下四捨五入。

当てて分析を行なってきた。そこで、今回はさらに、参禅行動の第一ステージにも焦点を当ててみることにし、特に参禅の動機の問題を取りあげ、その違いが、第二、第三ステージにどのような影響を及ぼしているかを検討してみることにした。それとともに、これも今までの報告では、分析の視点として考慮してこなかった男女差についても検討してみることにした。

二、方法

参禅アンケート調査の質問項目は、参考までに、付表1として本稿末尾に提示しておいたが、昭和五十一年度分の資料について、各質問項目ごとの単純集計結果を示したが、表1である。第三報での結果と比較してみると、今回の場合、多くの項目の選択肢(カテゴリー)の数がふえていることもあり、一見しただけでは、カテゴリーに対する選択状況は全く異なっているようにも見えるが、よくみると選択傾向はほぼ一致していることがわかる。

さて、「一、問題の所在」において述べたような今回の研究目的へ接近するための解析の順序としては、まず、男女による質問項目へのトータルパターンの違いを検討

し、つぎに、参禅行動の第一ステージである参禅前の坐禅に対する態度に焦点を当てて、参禅の動機の違いによる質問項目へのトータルパターンの違いを検討し、最後に、第三ステージの参禅後の坐禅に対する態度に関連して坐禅に対するイメージ変化の違いを、同じくトータルパターンとからみで検討することにする。なお、いずれの分析においても、今までと同様、数量化Ⅱ類を用いることにした。三つの分析それぞれにおける外部基準と説明変数とをまとめると、つぎのようである。

(イ)男女差の分析

外部基準……男女の二群

説明変数……表2の十二変数

(ロ)動機の分析

外部基準……表1の五カテゴリー(五群)

説明変数……表4の十一変数

(ハ)イメージ変化の分析

外部基準……第三報と同じ、つぎの六カテゴリー

(六群)

第一カテゴリー…よい
参禅前のイメージ
参禅後のイメージ
↓よい
いい

表2 男, 女を外部基準とした場合の数量化Ⅱ類の結果(a)

質問項目	選択肢	第1軸 ($r_1=0.500$)				
		サンプル数	数量化点	範囲 (Range)	偏相関数	単相関数
一、参禅の動機	1	27	0.079	0.237	0.162	0.176
	2	43	-0.020			
	3	83	-0.070			
	4	71	-0.158			
	5	290	-0.054			
二、参禅の評価 参禅の意義の	1	48	0.219	0.342	0.021	0.129
	2	155	-0.002			
	3	201	-0.123			
	4	69	0.168			
	5	26	0.074			
	6	15	0.075			
三、坐時のさ評 禅間長の価	1	89	0.356	0.475	0.031	0.129
	2	342	-0.119			
	3	83	0.109			
四、坐指にす評 禅導対る価	1	30	0.388	0.477	0.088	0.186
	2	399	-0.089			
	3	85	0.283			
五、坐指の容 禅導受度	1	165	0.140	0.264	0.027	0.066
	2	223	-0.124			
	3	126	0.035			
六、参禅する の前後での坐禅に 対するイメージの 変化	1	134	-0.010	0.228	0.068	0.118
	2	61	-0.125			
	3	18	-0.055			
	4	116	-0.027			
	5	124	0.103			
	6	11	0.037			
	7	14	-0.073			
	8	16	-0.062			
	9	20	-0.004			
七、坐生方にかの 禅生向役ど評 が活つ立う価 学のけつか	1	23	0.144	0.191	-0.032	0.107
	2	38	0.102			
	3	206	-0.008			
	4	169	-0.047			

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

	5	53	0.018			
	6	25	0.057			
八、 機会を持 いた 今後も坐 禅の	1	32	0.199	0.294	0.078	0.128
	2	85	0.012			
	3	186	-0.095			
	4	91	0.109			
	5	82	-0.026			
	6	38	0.062			
九、 食事に対 する満足 度	1	79	-0.264	0.555	0.275	0.241
	2	117	-0.156			
	3	122	-0.001			
	4	114	0.291			
	5	82	0.072			
十、 睡眠に対 する満足 感	1	62	0.176	0.280	0.135	0.134
	2	157	-0.028			
	3	25	0.136			
	4	181	-0.104			
	5	89	0.101			
十一、 法話に対 する評価	1	38	0.169	0.300	0.194	0.133
	2	120	0.165			
	3	198	-0.071			
	4	101	-0.131			
	5	35	0.004			
	6	22	0.039			
十二、 永平寺の 雰囲気 に対する 評価	1	75	0.022	0.341	0.109	0.115
	2	181	-0.184			
	3	114	0.157			
	4	73	0.074			
	5	48	0.144			
	6	23	0.064			

表3 男、女を外部基準とした場合の数量化Ⅱ類の結果(b)

カテゴリー	男	女
サンプル数	377	137
第一軸の数量化得点の平均値	0.126	-0.346

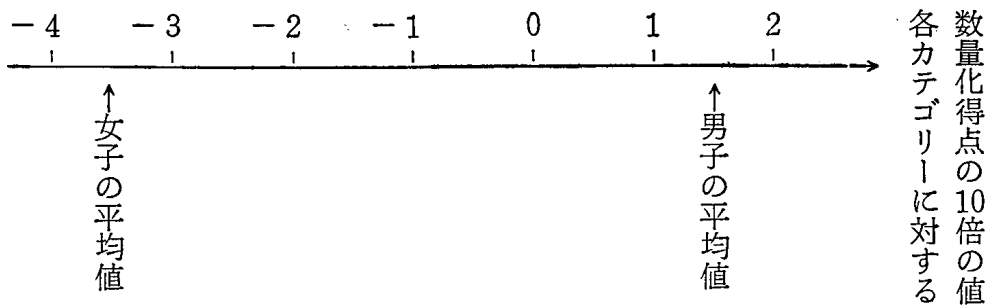


図1 数量化Ⅱ類により付与された各サンプルに対する数量化得点の男、女別平均値

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

- 第二カテゴリー… (よい) ↓どちらでもない
- 第三カテゴリー… (よい) ↓わるい
- 第四カテゴリー… (どちらでもない) ↓よい
- 第五カテゴリー… (わるい) ↓どちらでもない
- 第六カテゴリー… (どちらでもない) ↓わるい

説明変数：第三報と同じ、表1の第一、三、四、五、九、十、十一、十二の八項目。

三、結果と考慮

(イ) 男女差の分析について

数量化Ⅱ類による分析結果は、表2、表3及び図1に示すとおりである。この場合、外部基準は、男女の二群しかない。判別軸は、理論上一本だけしか算出できない。さて、表2に示すように、群の判別効率の指標である相関比は○・五〇〇となっている。相関比は決して高いとは言えないが、既述の十二項目でもって、男女の判別はある程度可能といつてよい。言い換えれば、十二項目の反応のト

1タールパターンには、男女差がみられるということである。

つぎに、説明変数としての十二項目のうち、どの項目が、男女差をよりよく説明できるかを見てみることにする。言い換えれば、参禅行動のどのレベルに、男女差が顕著に現われているかを分析してみようというのであるが、表2の範囲(レンジ)や偏相関係数の値からして、それらが、九、食事に対する満足度、十一、法話に対する評価、一、参禅の動機、などであることを読み取ることができ。さらに、表2の質問項目の各カテゴリに付与された数量化得点の値、及び表3と図1に示される男女ごとのサンプルに付与された数量化得点の平均値の値からは、つぎのような男女差が読み取れる。

(1) 女子では、食事に対して満足している者が多い。男子では、満足度が低いかあるいは、不満足に思っている者が多い。

(2) 女子では、法話に対してニュートラルな評価をしている者が多いが、男子では、ポジティブな評価をする者とネガティブな評価をする者とは分かれ、ニュートラルな評価をする者は少ない。

(3) 女子では、参禅の動機の積極度という点で、中程度ないしは低い者が多いが、男子では、動機が非常に積極的な者と、分類不能な者の両方に分れる。

いかなる原因でこのような男女差が生じたかについては、現在手持ちのデータだけからでは、十分に推論することはできないが、いずれにせよ、これらの結果は、参禅行動に何らかの男女差があることを示唆するものであり、興味深い結果といえる。

(四) 動機について

表4・表5及び図2に示すのは、参禅の動機を外部基準とした場合の数量化Ⅱ類による分析結果である。判別のための軸は、外部基準が五群あるため、理論上最大4本算出できるが、ここでは、それらのうち、判別効率の高い第一軸だけを取り出して、分析することにした。ちなみに、相関比は、第一軸が、○・四二四、第二軸が、○・三一六である。さて、表5に示した各サンプルに付与された数量化得点の平均値を用いて、動機の異なる五つの群を、二次元的にプロットしたのが図2である。この図からは、五つの群のうち、最初の四つの群(これらの群は、動機の積極さの度合いの順も表わしている)が、平面上にJ字型をかたち造っ

表4 参禅の動機を外部基準とした場合の
数量化Ⅱ類の結果(a)

質問項目	選択肢	サンプル数	第1軸 (0.424)				第2軸 (0.316)									
			数得 量 化点	範 囲	偏係 相 関数	単係 相 関数	数得 量 化点	範 囲	偏係 相 関数	単係 相 関数						
二、 参禅の 意義の 評価	1	48	0.194				0.134									
	2	155	0.131				0.216									
	3	201	-0.087	0.324	0.036	0.158	-0.178	0.394	0.005	0.107						
	4	69	-0.130				-0.066									
	5	26	-0.108				0.001									
	6	15	-0.015				0.020									
三、 坐時の 時間の 長さの 評価	1	89	-0.172										0.202			
2	342	0.095	0.301				0.112				0.098	-0.084	0.286	-0.020	0.012	
3	83	-0.206		0.131												
四、 坐指に 対する 禅導の 評価	1	30	0.096				0.179									
	2	399	-0.025	0.121	0.057	0.040	-0.063	0.293	0.061	0.076						
	3	85	0.083				0.230									
五、 坐指の 禅導受 容度	1	165	0.175				0.013									
	2	223	-0.094	0.269	0.029	0.074	-0.012	0.025	-0.014	0.021						
	3	126	-0.063				0.005									
六、 参禅の 前後で の坐禅 に對す るイメ ージの 変化	1	134	0.101				0.282									
	2	61	-0.149				-0.148									
	3	18	-0.028				-0.102									
	4	116	-0.058				0.088									
	5	124	0.048	0.260	0.073	0.135	-0.287	0.569	0.115	0.185						
	6	11	0.021				-0.016									
	7	14	-0.017				-0.002									
	8	16	-0.159				-0.042									
	9	20	-0.037				-0.031									
七、 坐活に うける 禅の役 が立っ たか 方立っ たか 学向か 生けど 生けど	1	23	-0.035										0.089			
	2	38	0.158										0.326			
	3	206	0.235				0.527				0.140	0.180	0.001	0.461	0.067	0.125
	4	169	-0.221										-0.135			
	5	53	-0.292	0.113												
	6	25	-0.034	0.086												
八、	1	32	0.169					0.220								
九、	2	85	0.301					0.274								

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

八、 今坐機持 後禅会ちか ものをた	3	186	-0.206	0.507	0.134	0.177	-0.328	0.612	0.143	0.148
	4	91	0.158				0.284			
	5	82	-0.108				0.017			
	6	38	0.049				0.093			
九、 食事に 対する 満足度	1	79	0.238	0.357	0.081	0.098	-0.060	0.334	0.056	0.070
	2	117	-0.119				0.082			
	3	122	-0.107				0.134			
	4	114	0.057				-0.200			
	5	82	0.021				0.019			
十、 睡眠に 対する 満足度	1	62	-0.177	0.287	0.094	0.040	0.088	0.214	0.032	0.066
	2	157	-0.047				0.101			
	3	25	0.007				-0.017			
	4	181	0.110				-0.113			
	5	89	-0.020				-0.005			
十一、 法話に 対する 評価	1	38	0.023	0.372	0.023	0.098	0.102	0.216	0.051	0.104
	2	120	0.223				0.006			
	3	198	-0.149				0.054			
	4	101	0.059				-0.114			
	5	35	-0.122				-0.092			
	6	22	0.006				-0.019			
十二、 永平寺の 霧の 評価	1	75	0.035	0.347	0.059	0.121	0.087	0.244	0.095	0.104
	2	181	0.163				0.127			
	3	114	-0.148				-0.019			
	4	73	-0.184				-0.117			
	5	48	-0.029				-0.090			
	6	23	-0.020				-0.063			

表5 動機を外部基準にした場合の数量化Ⅱ類の結果(b)

動機のカテゴリー		1	2	3	4	5
サンプル数		27	43	83	71	290
数量化得点 の平均値	第一軸	0.406	0.228	-0.002	-0.361	0.018
	第二軸	0.641	0.052	0.008	-0.046	-0.058

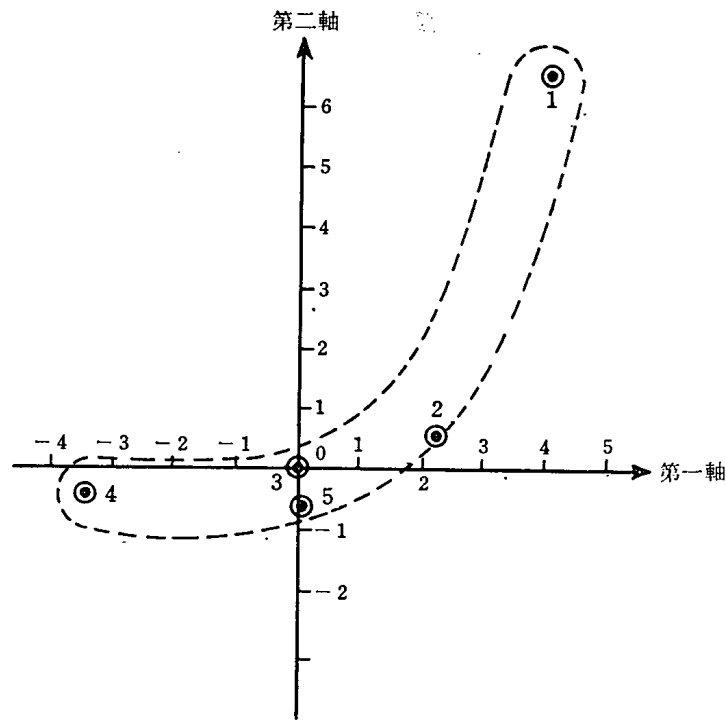


図2 動機の五つのカテゴリーの二次元での位置関係

て分布していることがわかる。そして、最後の第五群(この群は、動機が分類不能であったサンプルを表わしている)は、第三群に近い位置に布置していることがわかる。これらの結果からして、第一軸は、参禅の動機の積極度の違いを分ける軸と解釈することができるであろう。

そこで、こうした参禅の動機の積極度の違いによって、参禅行動のどのレベルに違いが生じているか、すなわち、参禅の動機の積極度を分ける要因が何であるかについて見てみることにする。表4がそれを示しているが、七、坐禅が今後の学生生活の方向づけに彼立つかどうか、八、今後坐禅の機会を持ちたいかどうか、など、主として参禅行動の第三ステージに関係している要因ばかりであることがわかる。ただ、ここで注意する必要があるのは、こうした要因として、六、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化、が含まれていないということである。言い換えれば、参禅の動機の積極度の違いは、参禅行動の第三ステージにまで、ある程度の影響を及ぼすが、といって坐禅に対するイメージ変化にまでは影響が及ばないということを示唆しているものであり、これまた興味深い結果といえる。

つぎに、第二軸の解釈についてであるが、図2から明らか

表6 坐禅に対するイメージ変化を外部基準にした場合の
数量化Ⅱ類の結果(a)

質問項目	選択肢	サンプル数	第1軸 (0.608)				第2軸 (0.361)			
			数得 量化点	範 囲	偏係 相関数	単係 相関数	数得 量化点	範 囲	偏係 相関数	単係 相関数
一、 参禅の 動機	1	27	0.084				0.115			
	2	43	0.012				0.014			
	3	83	0.134	0.196	0.128	0.185	0.002	0.164	0.106	0.134
	4	71	-0.062				-0.049			
	5	290	-0.033				-0.001			
三、 坐時の 禅間長 の評価	1	89	0.084				0.253			
	2	342	0.018	0.247	0.241	0.318	-0.100	0.353	-0.017	0.069
	3	83	-0.163				0.140			
四、 坐指に 禅導対 する評 価	1	30	-0.206				0.567			
	2	399	0.016	0.222	0.096	0.187	-0.119	0.686	0.116	0.154
	3	85	-0.002				0.358			
五、 坐指の 禅導容 受度	1	165	0.236				0.158			
	2	223	-0.125	0.361	0.103	0.180	-0.126	0.284	0.043	0.100
	3	126	-0.088				0.017			
九、 食事 に対する 満足度	1	79	0.099				0.237			
	2	117	0.192				0.003			
	3	122	-0.039	0.383	0.059	0.196	-0.140	0.377	0.073	0.169
	4	114	-0.191				-0.097			
	5	82	-0.046				0.111			
十、 睡眠 に対する 満足度	1	62	0.099				0.153			
	2	157	0.049				0.013			
	3	25	-0.113	0.212	-0.016	0.168	0.065	0.249	-0.001	0.070
	4	181	-0.036				-0.096			
	5	89	-0.051				0.047			
十一、 法話 に対する 満足度	1	38	0.128				0.288			
	2	120	0.320				0.309			
	3	198	0.013	0.695	0.233	0.352	-0.273	0.582	0.100	0.194
	4	101	-0.375				-0.019			
	5	35	-0.189				0.163			
	6	22	-0.053				0.100			
	1	75	0.232				0.310			

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

十二、	2	181	0.200				0.087			
	3	114	-0.145	0.567	0.227	0.368	-0.270	0.580	0.183	0.263
永霧対足	4	73	-0.257				-0.125			
平囲する	5	48	-0.335				0.001			
寺気る	6	23	-0.093				0.038			
のに満										

表7 イメージ変化を外部基準にした場合の
数量化Ⅱ類の結果(b)

カテゴリー		1	2	3	4	5	6
サンプル数		134	79	116	124	30	31
数量化得点 の平均値	第一軸	0.364	-0.196	0.126	-0.250	-0.031	-0.520
	第二軸	0.259	-0.157	-0.042	-0.173	-0.145	0.268

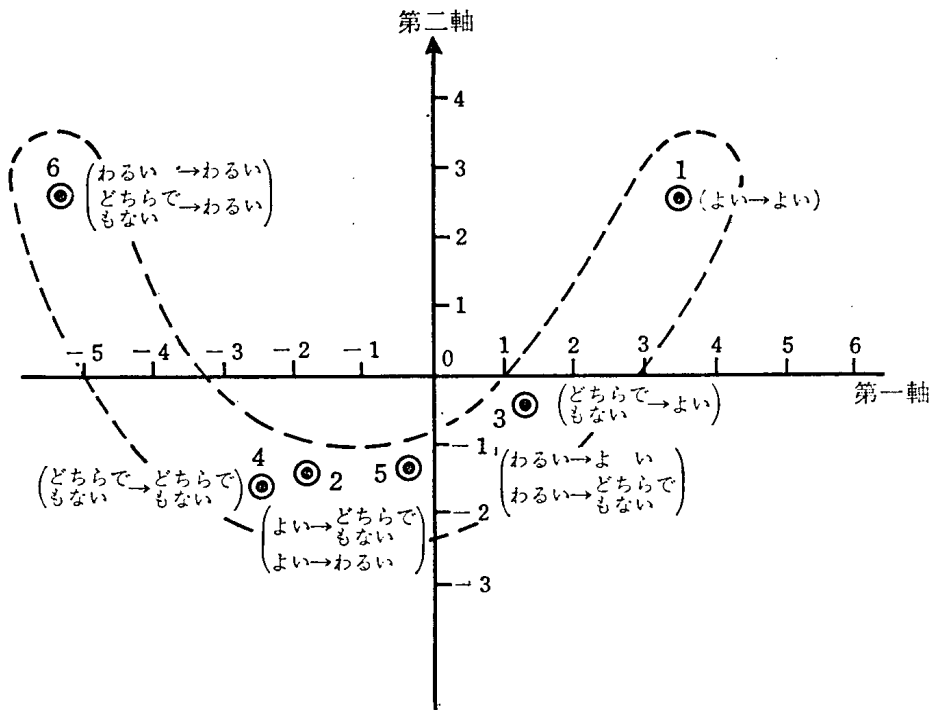


図3 変化したイメージの、二次元での位置関係

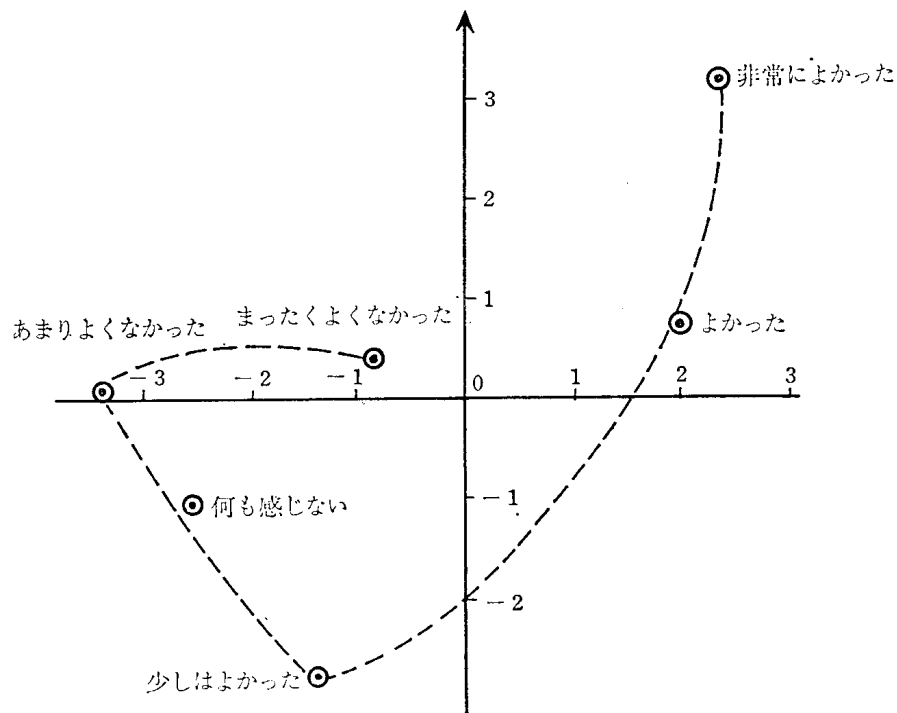


図4 「永平寺の雰囲気に対する評価」の各カテゴリーの、二次元上での位置関係

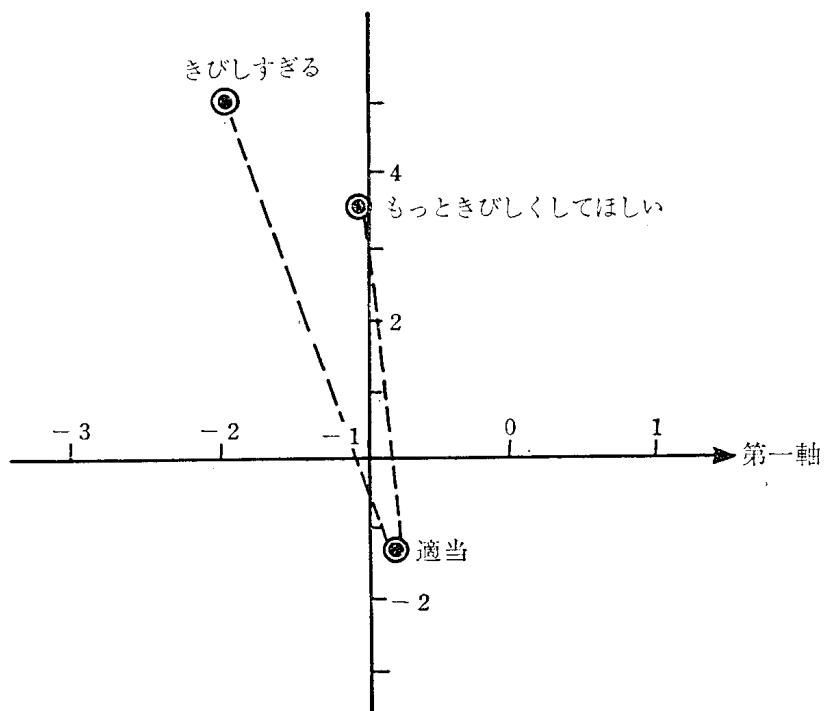


図5 「坐禅指導に対する評価」の各カテゴリーの、二次元上での位置関係

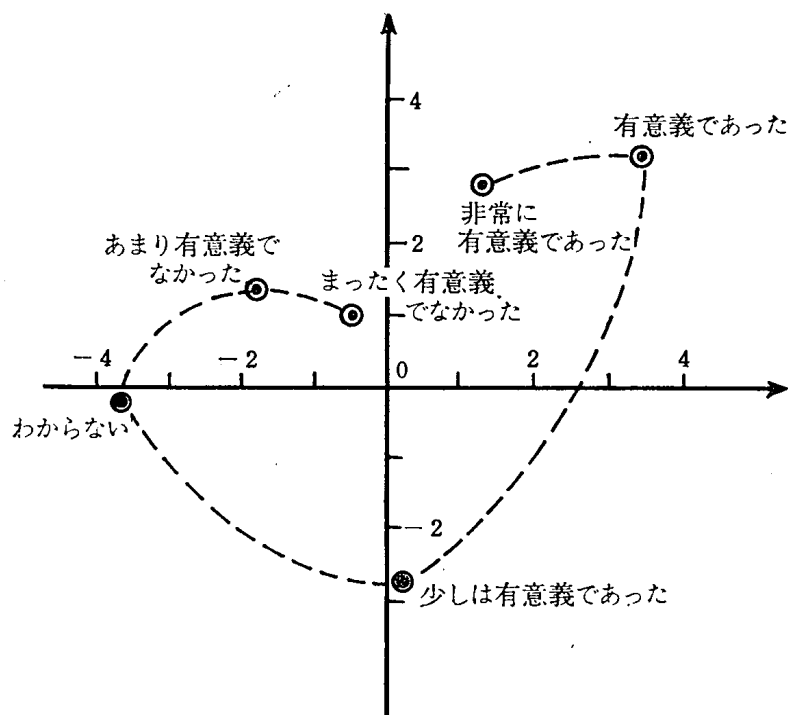


図6 「法話に対する評価」の各カテゴリーの、二次元上での位置関係

かなように、第二軸は主として動機の第一群と他の四群とを分ける軸とみてよい。すなわち、第二軸は、第一軸のよ
うな動機の積極度といった量的側面に関係する軸ではな
く、質的側面を判別する軸と考えてよいのではないかと思
われる。しかし、第二軸の相関比は極めて低く、明確な解
釈をすることは現段階では差し控えておく。

(ハ)イメージ変化の分析について

表6、表7及び図3、図6に示すのは、既述のイメージ
変化の六つの群を外部基準にした場合の数量化Ⅱ類による
分析結果である。

この場合、外部基準が六群あるため、判別軸は、理論上
五本まで算出できる。しかし、ここでは、判別効率の高い
最初の二軸だけを用いることにした。表6から第一軸の相
関比は、○・六〇八、第二軸のそれは、○・三六一である
ことがわかる。そして、表7に示すサンプルに付与された
数量化得点の群ごとの平均値をプロットした図3を見れば
明らかのように、第一軸は、イメージ変化における良化・
悪化の方向性を意味する軸であり、第二軸は、イメージ変
化の強度を意味する軸である、と解釈できる。

また、この第一軸、すなわち、イメージ変化における良

化・悪化の方向性に対して相対的に説明力のある変数は、表6の範囲(レンジ)や偏相関係数の値からして、十一、法話に対する評価、十二、永平寺の雰囲気に対する評価、三、坐禅時間の長さの評価、などであることがわかる。

これらの結果は、細かな点を除いては、概ね、第二、第三報、とりわけ第三報の結果と同じであると考えてよい。

最後に、第三報での残された今後の課題の一つとして掲げた、質問項目のカテゴリーを増加させる問題について若干検討してみる。今回は、九、十、十一、十二の四項目について、実際にカテゴリーを増やしたのであるが、十二、四、十一の三項目についてのみ、第三報における結果と比較してみる。図4、5、6の各図に示されているように、四、坐禅指導に対する評価の結果については、第三報の場合と殆んど異ならないといえるが、十二、十一の質問項目については、特に第一軸に関して、第三報の結果から予想されるところとはかなり異なる結果が示されているといつてよい。すなわち、項目十二、十一のカテゴリーの極に近い方では、カテゴリーの形式上の順序に乱れのあることが認められるが、これらの結果は、少なくとも、坐禅に対するイメージ変化の良否と質問項目十一や十二に対する反応

とは複雑にからみ合っていることを示唆しているといつてよいであろう。

四、要約と討論

昭和五十一年度の永平寺参禅者を対象とするアンケート調査の資料に基づいて、主として、坐禅を生活のうちにかそうとする態度形成の基礎になっていると考えられる参禅経験を媒介としての坐禅に対するイメージ変化について、各質問項目への反応のトータルパターンに着目した分析を行ない、第三報で報告してきたところと同様の結果が確認できるかどうかを検討した。

その結果、坐禅に対するイメージ変化を規定すると考えられる要因については、「坐禅時間の長さの評価」、「永平寺の雰囲気に対する評価」、「法話に対する評価」、などであることが明らかになった。これらの要因の現われは、第三報におけるとはほぼ同様の結果といつてよいものである。

さらに今回は、これまでの報告では分析の視点としてこなかった、参禅しようと思つた動機の問題と、参禅行動における男女差の問題、についても検討を試みた。検討の結果、それらの違いによって、参禅行動のいろいろな段階に

差異が生じていることが判明した。

なお、今回の報告のための解析の副産物として、第三報での問題点のひとつとして指摘してきた質問項目でのカテゴリーの増加ということについても、若干の検討を加えてみたが、予想に反する複雑な結果が得られ、そのことの意味づけについて考察した。

五、今後の課題

今回は、昭和五十一年度に収集した永平寺参禅のアンケートの調査結果に基づいて、第三報で得られた結果の再確認に主眼が置かれたが、第三報で残された課題として掲げた参禅の前後での、坐禅に対する態度測定の数値についての分析を行なうことが、今後の課題のひとつである。

付記

本研究に必要な計算は、すべて、愛知学院大学日進電子計算機センターの FACOM・F150 を用いた。

また、アンケート調査結果の整理に際しては、本学学生課の太田幸男、柴田光徳の両氏及び多くの女子職員の方々の全面的な協力を仰ぐことができました。ともにここに記して感謝の意を表します。

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

なお、本研究は、はじめにも述べたように、本学学生課との共同研究として進めてきているものであることを再度記しておく。

付表1 参禅アンケート調査の内容*

参禅終了時に記入して下さい

参禅アンケート (2)

S51.7

大学生の参禅行動の構造分析(その四)(江見・千野)

1. 参禅の動機を簡明に答えて下さい。
2. 坐禅についての感想
 - (1) 今回の参禅は有意義であったと思いますか
 1. 非常に有意義であった
 2. 有意義であった
 3. 少しは有意義であった
 4. わからない
 5. あまり有意義ではなかった
 6. まったく有意義ではなかった
 - (2) 坐禅時間の長さについてどう思いましたか。
 1. 短い
 2. 適当
 3. 長い
 - (3) 坐禅指導の仕方についてどう思いましたか。
 1. きびしすぎる
 2. 適当
 3. もっときびしくしてほしい
 - (4) 指導どうり坐禅できましたか。
 1. できた
 2. わからない
 3. できなかった
 - (5) 参禅の前と後で、坐禅に対するイメージはどのように変わりましたか。
 1. よい→よい
 2. よい→どちらでもない
 3. よい→わるい
 4. どちらでもない→よい
 5. どちらでもない→どちらでもない
 6. どちらでもない→わるい
 7. わるい→よい
 8. わるい→どちらでもない
 9. わるい→わるい
 - (6) 今後の学生生活の方向づけに役立ったと思いますか。
 1. 非常に役立った
 2. かなり役立った
 3. 少しは役立った
 4. わからない
 5. あまり役立たなかった
 6. まったく役立たなかった
 - (7) 現代の生活に坐禅は必要であり今後も坐禅の機会を持ちたいと思いますか。
 1. 非常に思う
 2. 思う
 3. 少しは思う
 4. わからない
 5. あまり思わない
 6. 全然思わない
3. 永平寺についての感想
 - (1) 食事はどうでしたか。
 1. 充分であった
 2. まあまあであった
 3. ふつうであった
 4. あまり充分とは言えなかった
 5. 不足であった
 - (2) 睡眠についてはどうでしたか。
 1. 充分とれた
 2. 少しはとれた
 3. わからない
 4. あまりとれなかった
 5. ほとんど眠れなかった

(3)法話について意見はありませんか。

1. 非常に有意義であった
2. 有意義であった
3. 少しは有意義であった
4. わからない
5. あまり有意義ではなかった
6. まったく有意義ではなかった

(4)永平寺の雰囲気についてどう感じましたか。

1. 非常に良かった
 2. よかった
 3. 少しは良かった
 4. 何も感じない
 5. あまりよくなかった
 6. まったくよくなかった
4. 往復の道中についての感想, その他意見があれば記入して下さい。

* なお, 出発時と参禅終了時にそれぞれ10項目の坐禅に対する態度を聞くアンケートも同時に行なったが, ここでは省略する。